

[研究ノート]

〈社会ダーウィニズム〉研究とベンジャミン・キッド『社会進化』

藤 田 祐

Ⅰ はじめに——社会ダーウィニズム概念の難点

〈社会ダーウィニズム〉は学術の世界にとどまらず一般社会にも流通している概念である。一般的には、生存競争 (struggle for existence) と自然選択 (natural selection) というダーウィンの進化メカニズムを人間社会に適用し、〈適者生存〉 (the survival of the fittest) をスローガンとして社会における自由競争を正当化する考え方だと捉えられている。近年でも、〈小さな政府〉を旗印にして政府支出の削減や規制緩和を通じて市場競争を推し進めようとするネオリベリズムが社会ダーウィニズムだと批判されることがある⁽¹⁾。このような例にも見られる通り、社会ダーウィニズムは特定の考え方を批判する際に用いられる言葉であり、必ずしも批判対象にきちんと対応した概念とは限らない⁽²⁾。進化論の歴史を研究してきたピーター・J・ボウラーは、進化論の入門書でベロミーの研究に依拠しながら (Bellomy)、社会ダーウィニズムは使われ始めた当初から対象を非難するための言葉であったと解説している (Bowler, *Evolution* 299)。

また、社会ダーウィニズムという言葉が指し示す内容も同一とは限らず、ダーウィニズムとどれほど結びつけられるべきものかについても見解が分かれている。社会ダーウィニズムを唱えた代表的な思想家はハーバート・スペンサーでダーウィンの進化理論とは無関係であるという議論もあれば、ダーウィンの進化理論と社会ダーウィニズムとの関係を強調する議論もある。また、社会ダーウィニズムと結びつけられる政治イデオロギーの典型は、国家の役割を削減して社会での自由競争に委ねることを主張する古典的リベリズム (20世紀アメリカのコンテキストでは保守主義) であるが、19世紀後半には右から左まで様々な政治的な立場がダーウィニズムの権威に訴えることで正当化されていた。〈社会ダーウィニズム〉はこのような歴史を通じて積み上げられた負荷を背負っており、一筋縄でいかない概念である⁽³⁾。本稿では、社会ダーウィニズムの研究史を概観した後に、社会ダーウィニズム研究における論点を整理し、1894年に出版され英米両国だけでなく世界中で広く読まれたベンジャミン・キッド『社会進化』の位置づけを探りたい。

II 社会ダーウィニズム研究史の断面

1 ホフスタッターの社会ダーウィニズム研究とその見直し

19世紀終わりに使われ始めていた社会ダーウィニズムという言葉が学術の世界にとどまらない人々に印象づけ、自由放任による弱肉強食の競争社会を理想とする人道に反した思想というイメージを広めたと言われている古典が、リチャード・ホフスタッター『アメリカにおける社会ダーウィニズム』である。ホフスタッターは、まずアメリカにおけるダーウィン進化論の受容について論述した後、スペンサー思想を社会ダーウィニズムの雛形と見なしてアメリカで流行した過程を論述している。スペンサー思想はダーウィンの進化理論に基づいて資本主義社会における自由競争を正当化した社会ダーウィニズムであるというイメージが示され広がったのである。しかしながら、ホフスタッターの著書では、スペンサーを称揚しアメリカにおける社会ダーウィニズムの唱道者とされているウィリアム・グレーム・サムナーだけでなく、同時に自他ともに認めるラマルキストであったレスター・ウォードの思想も取り上げられている。また、人種の劣化を防いで人種の質を向上させるために自然選択ではなく人為選択が必要だと考える優生思想や、帝国主義国家間の植民地獲得競争をダーウィン進化理論の生存競争に準えて人種の序列という観念で正当化する考え方も取り上げられている。19世紀の終わりに近づく、自由放任による個人間の競争を進歩の原動力だと考えるスペンサーを代表とする個人主義の社会ダーウィニズムが批判され、国家や人種という集団に立脚した社会ダーウィニズムが興隆してきたとされる。⁽⁴⁾「国内のビジネス」を正当化する社会ダーウィニズムから「海外への拡張」を正当化する社会ダーウィニズムへという流れがホフスタッターの図式である (Hofstadter)。

本書の結論では、科学理論としてのダーウィニズムが「中立的な道具」(Hofstadter 201) であり、どのような社会思想や政治的な立場も正当化できるという見解が提示されている。それを前提にして、なぜ19世紀後半のアメリカではダーウィニズムを個人主義的に解釈して古典的なリベラリズムを正当化する社会ダーウィニズムが流行したのかという問題が提起される。ホフスタッターによれば、弱肉強食の競争というタイプの自然選択理論が当時のアメリカの自己イメージだったからであり、支配的な人々がそのような競争自体がすばらしいことだとして前面に押し出したからである。しかし、社会ダーウィニズムの時代は、特にスペンサーと結びつけられる個人の競争を称揚する社会ダーウィニズムの時代は、第一次世界大戦までに終わりを向かえる。それをふまえて、生物学に基づく社会哲学を批判する段落で本書は締めくくられている (Hofstadter 201-04)。

このようなホフスタッターの議論はいわゆる社会ダーウィニズム研究における「リヴィジョニスト」によって疑問を突きつけられる。まず第一に、ホフスタッターが言うほど明確なかたちで社会ダーウィニズムが1870年代から20世紀初めにかけてのアメリカを席卷していたのかという問題がある。もう一つの問題として、ホフスタッターが提示したスペンサー型の社会ダーウィニズ

ムが生物進化論に基づいて政治や社会の議論をする思想の典型だったのかという問題がある。このような論点を提起してホフスタッターの著作によって流布された〈社会ダーウィニズム〉イメージを修正しようとした、リヴィジョニストの代表がロバート・C・バニスターである。バニスターによれば、1870年代から20世紀初めのアメリカでは、ホフスタッターが考えていたほど社会思想や政治思想は進化論の言葉遣いで語られておらず、また進化論の言葉遣いで語られていたとしてもホフスタッターが言うほど〈生存競争〉や〈適者生存〉という概念で社会における苛酷な競争が擁護されていたわけでもなかった。さらにバニスターは、ホフスタッターが社会ダーウィニズムの典型と見なした自由放任思想を批判した、革新主義につながる流れとダーウィニズムを結びつける。生存競争と適者生存というダーウィンの進化理論で自由放任の競争社会を正当化するという社会ダーウィニズム概念は、このような考え方を批判する側によってつくりあげられたイメージであり、むしろこのような進化理論の言葉遣いは自由競争を擁護する側よりも批判する側の改革ダーウィニズム (reform Darwinism) によって引き合いに出されていたとバニスターは論じる。バニスターによれば、ホフスタッターの著作によって流布された〈社会ダーウィニズム〉イメージは、19世紀後半の実態やコンテキストが反映されたものではなく、20世紀前半に興隆した革新主義の思想と同時代のコンテキストが反映された「神話」なのである。また、ホフスタッター以降、様々な思想に対して社会ダーウィニズムというレッテルを貼って批判的に論じることで、社会ダーウィニズム概念が無制限に拡散することになってしまった点をバニスターは批判している。ダーウィン進化理論だけでなく、生物進化論、さらには生物学全般に基づくあらゆる社会思想を社会ダーウィニズムと呼ぶとすれば、〈社会ダーウィニズム〉はほとんど無意味な概念になってしまうからである (Bannister)。

2 世界観としてのダーウィニズム

ホフスタッターのように社会ダーウィニズムの典型をスペンサーだと見なしてダーウィニズムと社会ダーウィニズムを切り離そうとしたりダーウィンとスペンサーの違いを強調したりする議論に対して、⁽⁵⁾「社会進化論者としてのダーウィン」という論文でダーウィンが展開した社会進化論を形成過程にまでさかのぼって論じたのがジョン・C・グリーンである。グリーンも指摘しているように、ダーウィンの『人間の進化 (The Descent of Man)』では、グレッグやゴルトンに依拠していわゆる社会ダーウィニズムや優生思想と重なる議論が展開されているが、同時に人間の社会性や人間社会における教育や文化の重要性も強調されている。グリーンは、ダーウィンの資料への書き込みやダーウィンのノートなど当時新しく利用可能になった資料を用いて、どのようにダーウィンが自らの社会進化論を形成していったかを明らかにしようとしている。そして、結論では、ダーウィンの進化理論を純粋な科学理論として社会の領域から切り離すのではなく、スペンサーやゴルトンの議論などを含む同時代の知との相互作用を通じてダーウィンが自らの理論を形成していったという点を強調している (Greene, "Darwin")。

さらにグリーンは、「世界観としてのダーウィニズム」という論文で、1860年代前後にスペンサーが提起した世界観をダーウィンとウォレスとハクスリーも共有していたと論じ、その世界観をダーウィニズムと呼んでいる。〈世界観としてのダーウィニズム〉の構成要素は、機械論的自然観、自然法則による生物進化論、経済学 (political economy)、科学という知を重視する実証主義である。第一の要素は、自然法則に従って運動する物体によって構成されるシステムと自然を捉えるニュートン以来の自然観である。第二の要素は、最も単純な生物から人間のような最も複雑な生物まで自然法則に基づく進化メカニズムを通じて生物が進化してきたという生物進化論である。第三の要素は、18世紀後半から19世紀前半にかけて確立した経済学と結びつけられる、市場における自由競争が富を最大化し人間に進歩をもたらすという想定である。第四の要素は、科学こそ人間が知識を得る唯一の手段だと考える実証主義である。グリーンはこのようなかたちで〈世界観としてのダーウィニズム〉という概念を提起することで、ダーウィンの進化理論を同時代の社会や知と切り離そうとする議論を批判し、同時代における知の環境とダーウィン進化理論が不可分であったことを強調するのである (Greene, "Darwinism")。

グリーンの〈世界観としてのダーウィニズム〉を引き継いで〈世界観としての社会ダーウィニズム〉を提起するのが、近年では最も包括的な社会ダーウィニズム研究である、マイク・ホーキンスによる『欧米思想における社会ダーウィニズム 1860-1945』である。ホーキンスの研究は、ホフスタッターの古典的な研究を見直して社会ダーウィニズムの影響力を小さく見積もるリヴィジョニストの研究に対する批判であり、19世紀後半から20世紀前半にかけて社会ダーウィニズムがヨーロッパとアメリカに深く浸透し大きな影響力を及ぼしていたことを示そうとしている (Hawkins)。

まずホーキンスは従来からある社会ダーウィニズムの定義を不十分だとした上で、社会ダーウィニズムの歴史研究をする際にきちんとした社会ダーウィニズムの定義を示す重要性を主張する。社会ダーウィニズムを構成要素から定義するだけでは不十分で構成要素間の関係性も重要だと主張するとともに、世界観としての社会ダーウィニズムとその世界観に基づいて機能するイデオロギーとを区別する。ホーキンスによれば、世界観とは「自然秩序」や「自然における人間の位置」や「時間の推移に伴う変化」などに関するひとまとまりの想定であり、イデオロギーとは人間と制度との関係に対する記述的な理論であるとともに社会制度や政治制度がどのように構成されるべきかという規範に関わる理論あるいは処方箋でもある。ホーキンスは、社会ダーウィニズムの世界観には複数の不確定要素が含まれているため多様性や変化の契機を内包しているため、様々なイデオロギー的な機能を果たすとともに変化しつつも一体性を保ち続けた柔軟な世界観だとみなす (Hawkins 1-38)。

ホーキンスが社会ダーウィニズムという世界観の構成要素としてあげているのは以下の五点である。第一の構成要素は、「人間を含む自然界の生物全体を支配する法則」である。第二の構成要素は、資源と人口増加の不均衡により生存競争を引き起こす人口圧である。第三は、生存競争

における適者と不適者を決定して遺伝によって集団全体に広がる属性という要素である。第四の構成要素は、選択と遺伝の効果が積み重なることで新しい種が生み出されたり種が絶滅したりすることである。このような自然法則に基づく生物進化のメカニズムが人間の身体的な性質だけでなく精神性や社会性にまで働くという点が最後の構成要素である（Hawkins 30-32）。また、ホーキンスは社会ダーウィニズムの世界観に柔軟性をもたらす不確定要素として以下の六点をあげている。第一点目は進化のメカニズムであり、生存競争や自然選択だけでなく性選択や獲得形質の遺伝も含めてどのような進化のメカニズムが取り込まれているかという点である。第二点目は生存競争の内実をどのように捉えるかであり、第三点目は進化メカニズムの単位を個体とみなすか種とみなすかということである。第四点目は進化過程を漸進的な過程と捉えるか跳躍する過程と捉えるかであり、第五点目は進歩と退化という進化の方向性である。最後の第六点目は、社会進化と生物進化の関係であり、社会進化をどこまで生物進化のメカニズムに還元するかである（Hawkins 32-35）。ホーキンスは、上述の不確定要素に伴う多様な要素を含みつつもそれらが核となる上述した五点の構成要素と特定の仕方では結びつくことで明確に規定されて一体性をもつことになる世界観として、社会ダーウィニズムを定義するのである。

このような社会ダーウィニズムの定義を提起した上で、ホーキンスは世界観としての社会ダーウィニズムがどのようなイデオロギー的な機能を果たしてきたかを分析していく。その際、分析の柱となる観点として、副題にもある通り「規範となる自然と脅威となる自然」という自然の二重性に注目している。一方で自然は自然法則を通じて社会に進歩をもたらすという意味で社会が模倣すべき「モデルとなる規範」であるが、他方で自然は人間社会に悪影響をもたらす「脅威」ともなり人間が抵抗すべき力を人間社会に及ぼす存在でもある（Hawkins 17-18, 35）。この自然が果たす機能の二重性が、ホーキンスによれば、世界観としての社会ダーウィニズムが果たすイデオロギーの機能の特徴づけるのである。

イデオロギーと世界観を区別して社会ダーウィニズムを定義し規範と脅威という自然の二重性に注目することで、ホーキンスの研究は様々なタイプの社会進化論を射程に入れることに成功しており、様々な進化理論が様々な政治イデオロギーを支えたことを分析できる枠組みを提起することに成功している。しかしながら、上述のような幅広い射程をもつ世界観を社会ダーウィニズムという名前で呼ぶべき理由は、ホーキンスがあげている実際にそのような言葉遣いがなされているということ以外に（Hawkins 16）、確固たる根拠は存在しないように考えられる。ホーキンスの研究では、最初から明確なたちと一体性をもった社会ダーウィニズムが実在していることを前提にしているのではないかという疑念は拭い去れないのである。

III 〈社会ダーウィニズム〉研究における論点

社会ダーウィニズムの一般的な定義あるいは辞書的な説明は、ダーウィンの進化理論を人間社会に適用した思想というかたちでなされることが多い。そして、このような定義に基づいて、自然界を対象とする科学理論を人間社会に適用した社会ダーウィニズムはダーウィン進化理論の濫用、さらに言えば悪用であると批判されてきた。しかし、このような説明が暗黙のうちに前提としている、自然界を対象とする科学と社会思想や政治思想というかたちのイデオロギーとの区別自体が、〈社会ダーウィニズム〉研究では疑問に付されてきた。このような問題を提起した代表的な研究者が、〈世界観としてのダーウィニズム〉を提起した上述のグリーンと「ダーウィニズムこそ社会的である」というテーゼを打ち出したロバート・M・ヤングである。また、社会ダーウィニズムをどのように捉えるかという問題を考察するためには、科学理論として捉えるのか、そうすべきでないのかも含めて、ダーウィニズムをどのように捉えるかという問題も考察する必要がある。この問題と関連して、ポール・クルックは、社会ダーウィニズムの範囲を広く取るのか限定して狭く取るのかによって、社会ダーウィニズムを研究する学者を「一般論者 (generalists)」と「限定論者 (restrictionists)」という二つのカテゴリーに分けている。ダーウィニズムを現代の観点から理解すべきなのか。当時のコンテキストで理解すべきなのか。このような問題もある。現代の観点からは、生存競争と自然選択というダーウィンが提起した進化過程が、純粹により環境へ適応した個体がより多く子孫を残すことで種を構成する個体の形質が変化していく過程と捉えられる。一方ヴィクトリア時代には、ボウラーが強調しているように、広く浸透していた進歩の必然性という枠組みでダーウィンの進化過程も解釈された。いわゆる社会ダーウィニズムもこのような同時代のダーウィニズム理解と深く結びついている。以下では、上述の論点を個別に検討した後、ヴィクトリア時代の進化理論において決定的に重要だった問題設定である「自然における人間の位置 (man's place in nature)」という観点から社会ダーウィニズム概念を考察する。

1 ダーウィニズムと社会ダーウィニズム

ヤングは、科学と社会や科学理論と社会思想・政治思想を切り離そうとする議論に対して、ダーウィンが自らの進化理論を発想し固めていった19世紀前半に「自然における人間の位置」を議論する共通のコンテキストが成立しており、自然と人間と社会、そしてそれらの関係が一体となって議論されていたと論じる (Young, *Darwin's Metaphor*)。この議論の前提となっていたのが斉一的な自然法則に従う自然という考え方である。このコンテキストで自然法則に支配される人間という考え方が提起され、「価値体系の自然主義化」(Young, "Darwinism" 611) が引き起こされた。ヤングによれば、ダーウィニズムはこのようなもっと広い流れの一部にすぎないのである (Young, "Malthus"; "Darwinism")。

この過程で決定的に重要だったのが、1798年に匿名で出版された『人口論』初版で最初に提起

されたマルサスの人口理論である。マルサスは、人間の生存には食料が必要であるという公理と男女間の情欲は人間本性に埋め込まれた不変の性質であるという公理から人口の原理という普遍的な自然法則を導き出す。普遍的な自然法則として、人口増加のペースは食料増産のペースをはるかに上回り、この不均衡の結果として社会には不可避免的に貧困がもたらされると論じるのだ（Malthus）。ヤングによれば、このような不均衡が内在している〈自然〉は自然における調和を強調する18世紀の楽観的な自然観に対する一撃となったのである（Young, “Malthus” 24-31）。

ダーウィンは『人口論』第6版を読んで、このような不均衡による慢性的な食糧不足が引き起こすものとしてマルサスが提起した〈生存競争〉を自らの進化理論の柱として受け継いだ。⁽⁶⁾ヤングが強調するのは、マルサスの人口理論とダーウィンの進化理論が同じ問題群をめぐる⁽⁶⁾なされた共通のコンテキストにおける議論から生み出された理論だという点である。この前提に立つと、マルサスの人口理論が社会における貧困のメカニズムを解明する社会問題に関する理論で、ダーウィンの進化理論は自然界における進化のメカニズムを解明する自然科学の理論だという区別は成り立たない。両者はともに、自然と人間と社会の関係性を一体的に解明しようとする「自然における人間の位置」をめぐる問題に取り組んだ結果として定式化された理論だからである。このような意味で、ヤングによれば、「ダーウィニズムそのものが社会ダーウィニズム」なのである（Young, “Malthus”; “Darwinism”）。

2 〈ダーウィニズム〉とは何か？

社会ダーウィニズム概念を理解するためには、ダーウィニズム概念を理解する必要がある。しかし、確固たるアイデンティティをもったダーウィニズムという科学理論が存在し、それを社会に適用したものが社会ダーウィニズムであると単純に考えることはできない。ダーウィンの進化理論をどのように理解してどのように受容するかは、様々な水準で多様だからである。さらには、ダーウィンと同時代にダーウィニズムしか進化理論が存在しなかったわけではない。ダーウィンも自らの進化理論に取り入れた獲得形質の遺伝を柱とするラマルキズムを初めとして、ダーウィニズムに対抗する様々な進化理論が見られたのである。ボウラーは、『非ダーウィン革命』（日本語訳のタイトルは『ダーウィン革命の神話』）という著書で、『種の起源』は神による個別創造説と対立する意味での進化論に人々を改宗させることにはそれほど間を置かずに成功し、進化という事象自体に対する抵抗は長続きしなかったが、共通起源説に基づく枝分かれ進化モデルや生存競争と自然選択を通じた環境への適応という進化過程は同時代の人々にはほとんど理解されず受容もされなかったと論じている。ボウラーによれば、同時代の人々には、ダーウィニズムという名前で現代的な意味でのダーウィニズムとは異なる進化理論を唱道した人々もいれば、公然とダーウィニズムに異を唱えて伝統的な価値観とより適合する進化理論を唱えた人々もいた。19世紀後半には多様な進化理論が割拠しており、最も名の知れた進化理論であったとしてもダーウィニズムの独壇場ではなかった。ボウラーによれば、19世紀後半に展開されていた進化理論のほとんど

は、当時の通念であった進歩の思想に乗っかって進化も元の状態よりも望ましい状態に発展する過程と捉えており、現代の進化理論とは相いれないものであった。ゆえに、通常「ダーウィン革命」と呼ばれる変化を、ボウラーは「非ダーウィン革命」と呼ぶのである。ボウラーによれば、手法を工夫さえすれば特定の進化理論を用いてどのような政治的な立場も正当化できるのであり、実際に様々な進化理論に基づいて様々な政治的な立場が正当化されていた。ダーウィンの進化理論を用いて自由放任の古典的リベラリズムだけでなく、対立する社会改革を求める立場も正当化できたのであり、その際になされるダーウィン進化理論の解釈も様々であった。ダーウィニズムによって市場における自由競争を擁護したという〈社会ダーウィニズム〉イメージを広めたホフスタッターも、ダーウィニズムと資本主義イデオロギーが本質的に結びついていると批判的に論じたヤングも、現代的な観点から定義されたダーウィニズムが19世紀後半の時代潮流であったと見なしている点で問題があるとボウラーは考えるのである (Bowler, *Non-Darwinian Revolution*)。

3 〈社会ダーウィニズム〉の範囲と進化の単位

クルックは、社会ダーウィニズム概念に関するレビュー論文で、ボウラーのような研究者を〈社会ダーウィニズム〉研究における「一般論者」と呼んでいる。進化理論としてのダーウィニズムを幅広く捉え、多様な解釈がなされた多様なダーウィニズムに基づいて多様な政治的な立場が正当化されたものとして〈社会ダーウィニズム〉を捉えるからである。それに対して、ダーウィニズムを限定的に解釈し、ダーウィン進化理論は特定の政治イデオロギーを正当化する理論であると考えるのが「限定論者」である。「限定論者」にとっては、〈社会ダーウィニズム〉とは特定のイデオロギーである (Crook, "Social Darwinism" 261-63)。代表的な論者として、社会ダーウィニズムという用語を優生学を指し示すのに用いるべきであると主張したハリデイ (Halliday)、そして「すべての社会ダーウィニズムはまさに改革ダーウィニズムであった」 (Bannister 158) というテーゼを提起したバニスターをあげている (Crook, "Social Darwinism" 263-71)。バニスターの議論は、上述したように、ホフスタッターが広めた〈社会ダーウィニズム〉イメージに対するカウンターとして提起されたものである。この論文でクルックはバニスターの議論を好意的に紹介し、「ダーウィンが社会ダーウィニストであったとすれば、資本主義や軍事主義を擁護する社会ダーウィニストよりは改革擁護の社会ダーウィニストにずっと近いと論じられるだろう」 (Crook, "Social Darwinism" 271) と締めくくっている。

バニスターの見解に対しては「一般論者」から批判が寄せられた (Crook, "Social Darwinism" 267-68)。クルックが「一般論者」に分類しているボウラーは、特定の科学理論が特定の政治イデオロギーと必然的な結びつきがあるという見解を批判する際に、「どのような理論を用いても類比の方法をこねくりまわすだけでどのような社会政策でも正当化できる」 (Bowler, *Non-Darwinian Revolution* 155) と想定している。興味深いのは、バニスターのホフスタッター批判を引き継いで社会ダーウィニズム研究の見直しをすすめたボウラーが、クルックが定式化した「一

般論者」対「限定論者」という対立図式では、バニスターと同じ「限定論者」ではなくホフスタッターと同じ「一般論者」の側に立つところである。ボウラーは、ホフスタッターのように科学理論を「中立的な道具」(Hofstadter 201) とはみなさず、科学理論が社会関係や社会思想と相互作用しながら構築される点は認めるが、特定の科学理論が無制限ではないにしても方法次第で様々な政治的な立場を正当化しようと論じるのである。

しかし、ボウラーも別の著作で認めているように (Bowler, *Biology* 61-65)、必然的な結びつきはないとしても、政治イデオロギーの正当化と科学理論の具体的な中身が全く無関係であるというのは言い過ぎだろう。例えば、進化理論における競争の単位として「個体」と「集団」のどちらを第一に考えるのかということと、人間社会における競争において個人間の競争と国家間あるいは人種間の競争のどちらを重視するのかは全く無関係ではない。バーナード・センメルは、ある社会内における個人間の競争を重視するタイプの社会進化論を「集団内における社会ダーウィニズム (internal Social-Darwinism)」と呼び、国家や人種などの集団と外部の集団との競争を重視するタイプの社会進化論を「集団外に対する社会ダーウィニズム (external Social-Darwinism)」と呼んだ (Semmel 18-20)。ダーウィンの進化理論にもキッドのも含む多くの社会進化論にも個体間の競争と集団間の競争がともに含まれていたが、社会思想・政治思想に対する含意を考えると、両者の間には緊張関係が生じうる。実際に帝国主義時代における国家間の競争を自然界における生存競争に準えるタイプの社会進化論では、国家間の生存競争を勝ち抜くためにスペンサーが重視したとされる社会における個人間の競争を抑制して社会福祉を増進すべきであると主張されたりもした。これこそ、センメルが「集団外に対する社会ダーウィニズム」と呼んだタイプの社会進化論であり、社会思想・政治思想のコンテキストでは国家社会主義 (state socialism) や社会帝国主義 (social-imperialism) と呼ばれる流れと結びついたものである (Semmel 18-20)。

このような帝国主義国家間の競争は、進化論と結びつきやすい概念であった〈人種〉をめぐる言説と結びつくかたちで語られる傾向にあった。当時の通念では、文明社会で暮らすヨーロッパ人が、中でもゲルマン系を指すチェートン人が人種の序列における頂点を占めると考えられ、未開と当時みなされた社会で暮らす人々は知性を初めとして様々な点でヨーロッパ人に及ばない劣等人種だと考えられていた。ダーウィンは奴隷制度に嫌悪感を示したりジャマイカ事件に対しては現地人に残虐行為をしたエア総督を糾弾したりと当時としては進歩的な考え方の持ち主であり (Desmond and Moore)、ボウラーが指摘しているように、ダーウィンの進化理論が提起する進化の枝分かれモデルは下等な種と高等な種という序列を突き崩す革新性を秘めていた (Bowler, *Invention* introd., ch.3, ch.4, ch.5; *Non-Darwinian Revolution* ch.6)。しかしながら、『人間の進化』ではダーウィンも、人種の序列を前提にして、類人猿から野蛮人、そして野蛮人から文明人という進化の図式を提示し、部族間の生存競争を人間の知性や道徳性を発展させた進化過程と捉えて人種の絶滅について論じている (Darwin ch.4, 152-58, 211-22)。しかし、ダーウィンの進化理論では、特にその現代的な解釈では、生存競争の単位は第一義的には個体である。現代的な解釈が

ら当時受容されたダーウィン理論の是非を問うのは不毛であるにしても、上述したようなタイプの社会進化論を「集団外に対する社会ダーウィニズム」と呼ぶべきかという問題には再考の余地があるのだ。

4 社会進化論の特質

社会進化論を特徴づける要素とはどのようなものだろうか。一つは、ボウラーが強調する通り、進化論と進歩の思想を結びつける点である。すでに見たように、19世紀後半に展開された様々なタイプの進化理論は、ボウラーによれば、ダーウィンの追随者によるものであれダーウィンの批判者によるものであれ、現代の生物学ではダーウィン進化理論とは相いれないと見なされる進化と進歩を同一視するものであった (Bowler, *Non-Darwinian Revolution*)。また、『進歩の発明』という著書では、直線的な進歩を強調する進歩モデルと集団の栄枯盛衰を通じた進歩モデルという違いはあれ、様々な領域で進歩の思想が展開されたことをボウラーは示している。前者の進歩モデルにはセンメルが「集団内における社会ダーウィニズム」と呼んだスペンサーの社会進化論が含まれ、後者の進歩モデルはセンメルが「集団外に対する社会ダーウィニズム」と呼んだものに対応している。しかし、ボウラーによれば、生物進化論やそれに基づく社会進化論に限らず、歴史学や人類学など他の様々な領域で両者のモデルは見られた。ホフスタッターやセンメルによって社会ダーウィニズムとみなされた人種や集団間の競争を通じて進歩がもたらされるという思想は、ダーウィン進化理論とは別の起源を持つものであり、ダーウィン進化理論とは関わりのない人々やダーウィン進化理論を批判していた人々によっても主張されていたのである (Bowler, *Invention*)。

このように競争あるいは闘いを通じた進歩というモデルはダーウィン進化理論を導入したものとは限らず、狭い意味での生物進化論や社会進化論を超えて様々な領域で見られた。ダーウィン進化理論とは異なる起源をもち、ダーウィン進化理論とは無関係に、あるいはダーウィン進化理論と結びつきながら、展開されたのである。このような進歩の思想が19世紀を通じて隆盛した背景には、産業化に伴って急激に社会が変化していたことだけでなく、地質学と古生物学、そして人類学と考古学の発展に伴い、時間の観念が大幅に拡張されたことがある。このような時代状況の中で未来への指針が求められ、現在の急激な変化を説明するのに過去が参照されたり、逆に過去の変化に依拠して現在の変化が説明されたりした (Bowler, *Invention* introd.)。19世紀末が近づくと、ヨーロッパ文明の将来に対する不安が広がった結果、〈退化〉という事象に関心が集まったり、自然選択のメカニズムが働かず「不適者」が生き残り子孫を増やすという〈逆選択〉(negative selection) に対する危惧が広がったりした。しかし、このような不安は、進歩の思想と対立するものというよりは、進歩の思想という表面の裏側に張り付いた不安と捉えるべきだと考えられる。ボウラーが強調するように、このような進歩をめぐる19世紀のコンテキストでダーウィンの進化理論は形成され受容されたのであり、ダーウィンの進化理論がこのような時代状況を生み出した

のではない。進歩の思想はしばしばダーウィンの進化理論と結びつけられたが、ダーウィンの進化理論と必然的な関係性はなく独立に展開されていた (Bowler, *Invention*)。ゆえに、競争を通じた社会の進歩を基礎づける理論は、社会ダーウィニズムよりももっと幅広い射程をもつ社会進化論と呼ばれるのが望ましいのである。

社会進化論を分析する別の観点としては、自然と社会の関係がどのように捉えられているかという問題がある。生物進化理論を社会に適用したという意味での社会進化論を特徴づけるのは、自然と社会が連続的に捉えられ自然も社会も同じ自然法則に貫かれていることを前提にしている点である。社会がどのように進化するかという理論という意味での社会進化論は必ずしも生物進化論に基づく必要はなく、自然法則とは異なる社会独自の進化メカニズムを想定することも可能である。ただし、第一の意味での社会進化論を特徴づけるのは第二の意味での社会進化論を生物進化論のメカニズムで説明するところにある。第一の意味での社会進化論が自然と社会を連続的に捉える理論であるなら、人間と自然との関係も連続的に捉える理論であり、いわゆる「自然における人間の位置」という論点に関して人間を自然界から超越した存在と捉えるのではなく他の生物と同様に自然界に包含される存在と捉える理論ということになる。人間が動物から進化してきたと捉える生物進化論は人間も自然法則に支配される存在であるという考え方に科学的なお墨付きを与えたのであり、生物進化理論に基づく社会進化論は自然界と同じく人間社会も自然法則に基づいて進化してきたと捉えるのである。自然法則によって決定される人間という考え方は、生物学の枠組みでは遺伝メカニズムによって決定される人間本性ということになる。これが、いわゆる生物学的決定論 (biological determinism) であり、生物進化論に基づいた社会進化論と結びついて展開されてきたのである。

以上の議論をまとめると、生物進化論に基づく社会進化論は、進化のメカニズムを通じて進歩が起こると想定し、社会の進化も究極的には生物としての人間の進化に還元できると考える理論だとみなすことができる。進化のメカニズムがどのように説明され、進歩の観念とどのように結びつけられているのか。人間の進化が社会の進化とどのように関連づけられているのか。さらに一般化すれば、自然と進歩の関係、そして自然と人間と社会の関係がどのように理論化されているのか。このような観点が、進化社会理論を分析する際の参照点となるのである。

IV ベンジャミン・キッド『社会進化』の位置づけ

これまでまとめてきた社会ダーウィニズム研究では、ベンジャミン・キッド『社会進化』はどのように位置づけられているのか。また、その位置づけと上述の論点をふまえてどのように位置づけるべきか。

1894年当時全く無名の下級公務員によって出版された『社会進化』は英米両国でベストセラーになり、様々な人々によって論評された。⁽⁷⁾『社会進化』の基本的なスタンスは、19世紀後半に確立

されたダーウィン進化理論という最新の科学で、特にワイズマンが唱道した自然選択のみを進化の原動力だと考えるネオダーウィニズムに基づいて、社会進化を説明するというものである。現代生物学におけるダーウィン進化理論では、環境に適応した個体が生存競争を通じてより多くの子孫を残すことで種全体の形質が変化するのが自然選択のメカニズムであり、自然の進化過程は進歩を意味するものではない。しかし、キッドも他の19世紀の進化理論家と同じように自然進化の過程を進歩と結びつけ、ダーウィンの進化メカニズムによる進歩を自らの社会進化論の中核に据える。その上で、キッドは文明社会にいたる社会進化の過程に対立する要素を見いだす。理性と知性に基づく利己性の進化と「超合理的 (ultra-rational)」な宗教性に基づく利他性の進化である。この対立図式がキッドの社会進化論を特徴づける点である。キッドは、利己性につながる理性と知性を否定的に捉え、知性の発展を文明社会への進歩と結びつける当時の通念に挑戦する。キッドの考える社会の進歩とは、理性を越えた宗教性に根ざす利他性が発展して個人の利益よりも社会有機体の利益が優先されるようになることで、〈社会の能率〉 (social efficiency) が高まることなのだ。そして、利他性の進展によって現在における社会有機体の利益だけでなく将来における社会有機体の利益も追求されるようになる。また、利他性が発展して社会が進化すると、〈機会の平等〉 (equality of opportunity) が実現し、より多くの人々が平等な条件で社会における競争に参加できるようになる。結果として、ますます社会進化が進んで〈社会の能率〉が高まることになる。キッドはこのような社会有機体の進化として社会進化を捉える一方で、社会進化の過程を人種間の生存競争とも捉えている。高度な文明社会を打ち立てたアングロ・サクソン人種がオセアニアの先住民などの人種を追いやって、直接的な手段ではないにせよ、間接的な手段で絶滅させることを正当化しているのである。また、ヨーロッパ内におけるプロテスタントの優位を主張し、宗教改革が利他性と〈社会の能率〉を高めたことを強調する (Kidd)。

このようなキッドの社会進化論は、これまでの社会ダーウィニズム研究でどのように位置づけられてきたのか。ホフスタッターは、キッドが『社会進化』で展開した思想を「反啓蒙主義 (obscurantism) と改革主義とキリスト教と社会ダーウィニズムの特異な混合」と呼び、信仰を支える合理的な基盤を求めた宗教信仰者や自由放任の社会ダーウィニズムとは対立すると捉えている (Hofstadter 100-01)。センメルは、キッドが「集団内における社会ダーウィニズム」を全否定してはいないと指摘しつつ、キッドをカール・ピアソンと並ぶ「集団外に対する社会ダーウィニズム」を唱えた代表者と捉えている。社会進化が個人の利益よりも社会有機体の利益を優先させるようになることだと考えられていることを根拠にして、キッドの社会進化論をダーウィン進化理論によって社会帝国主義を正当化した思想だと考えるのだ。また、キッドが個人主義と社会主義を敵と定めたのは、理性と自己利益に根ざしているために自らの「集団外に対する社会ダーウィニズム」が拠って立つ利他性を脅かすと考えたからだともセンメルは論じている (Semmel 20-24)。『社会進化』は海外進出を成功させるために国内の社会政策を充実させるという社会帝国主義をダーウィン進化理論で正当化した社会ダーウィニズムであるというセンメルの図式は、

『ニュー・リベラリズム』という著書の中でマイケル・フリーデンによって批判されている。競争よりも協力という利他主義が進歩主義的な進化社会理論に浸透していた点を過小評価しているからである。フリーデンによれば、共同性を重視し貧困に対する社会保障を求めた新しいリベラリズムに向かう潮流では自由放任の社会ダーウィニズムは相対化され、自己利益を追求する競争よりも人間の利他性や主体性を重視する方向に向かっていた。フリーデンは、この潮流にキッドの『社会進化』も位置づけているのだ (Freeden 79-85)。ホフスタッターが広めた〈社会ダーウィニズム〉イメージの見直しを主張したバニスターも、キッドの『社会進化』は、自由放任による競争を唱道する個人主義でも競争を否定する社会主義でもなく、サムナーのような古典的なリベラリズムと20世紀初めの革新主義とを結びつける「環(link)」だと論じている (Bannister 155)。実際にキッドは、自由放任を擁護する保守主義側からは社会主義だと批判され、社会主義者からは保守的だと批判された (Bannister 154-55)。自由放任と社会主義の中道に位置づけられるニュー・リベラリズムと親和的なキッドの社会進化論は、バニスターによれば、ダーウィニズムに基づいて社会への積極的な介入を求める改革ダーウィニズムであり、ダーウィニズムが競争と自由放任を必然的に擁護するわけではないことを示しているのである。⁽⁸⁾さらにホーキンスも、欧米の社会ダーウィニズムに関する包括的な研究で、キッドを社会ダーウィニズムを唱えた代表者の一人としながらも (Hawkins 4-5)、改革ダーウィニズムを論じた章で『社会進化』を個人主義と社会主義の中道に位置づけ、社会主義に批判的でニュー・リベラリズムに親和的だとみなしている (Hawkins 171-75)。

キッドの社会進化論が、1886年に自由党と袂を分かち自由連合党 (Liberal Unionist Party) を結成して保守党と結びついたジョセフ・チェンバレンに代表される社会帝国主義を支える理論なのか。それとも、20世紀初めの社会保障立法に結実する新しい自由党の理念であるニュー・リベラリズムを支える理論なのか。上司であったアルフレッド・ミルナーの助力で『社会進化』を出版しただけでなく人脈も広げたキッドは前者の政治運動に関わっていくことになるが (Crook, *Benjamin Kidd*)、キッドの社会進化論と政治イデオロギーの関係はまた別の問題であり、独立に検討すべき課題である。さらに、キッドの社会進化論そのものをどのように分析して評価すべきかという問題がある。キッドの社会進化論が社会改革を支える〈改革ダーウィニズム〉に含まれるとして、どのような枠組みでどのような論理で支えているのかという問題を検討すべきである。その際に分析の柱とすべきなのが上述の論点であり、進歩の思想がどのようなメカニズムで支えられているのかという観点と、自然と社会の関係がどのように捉えられているのかという観点である。

キッドは、進歩が生命の誕生からダーウィンの進化メカニズムで進んで来たことを強調している。キッドによれば、「生命の始まりからあるゆるところで進歩が同じようにもたらされてきて、他のかたちでは不可能だった」のであり、進歩は「選択と拒絶の結果」なのである (Kidd 34)。また、「生命の法則は初めからずっと同一」であり、「終わることのない不可避の格闘と競争、終わる

ことのない不可避の選択と拒絶、終わることのない不可避の進歩」なのである (Kidd 39)。社会進化を駆動し進歩をもたらすメカニズムが専らダーウィンが提唱した自然選択のメカニズムなのだとしたら、社会進化の過程で生じる知性や理性と道徳性との緊張関係、利己性と利他性の緊張関係はどのように説明されるのか。『社会進化』の研究には、宗教による「超合理的 (ultra-rational)」な契機を通じて発展する利他性が自然の進化過程を乗り越えるものとして提起されていると解釈しているものもある。⁽⁹⁾しかしながら、キッドは社会進化のメカニズムとしてダーウィンの名前と結びつけられた自然進化のメカニズムしか提示していない。社会進化の過程は基本的に生物進化のメカニズムに還元されているのだ。そして、超自然的な契機を導入していない以上、利他性を超自然的なメカニズムで発展したものと解釈することはできない。ここにキッドの社会進化論の難点があり、『社会進化』における自然と社会の関係を解釈する際の難問が横たわっている。

この難問を解く一つの鍵はキッドの社会主義批判にある。キッドはヴァイスマンに依拠して競争が起これないと進歩が停滞するだけでなく社会は必ず衰退に向かうと論じる (Kidd 36-37)。この前提に立って、人口を調整することで人口増加の圧力に由来する生存競争を抑圧して人々が平等に快適な暮らしをおくれるようにすることをめざす社会主義は (Kidd 74)、人口増加の圧力に伴う困難にさらされるだけでなく、進歩という競争の果実が失われ退化に向かうとキッドは論じる (Kidd 209-10)。少なくとも社会主義批判の文脈では、社会進化を引き起こすのは専ら生存競争という自然進化のメカニズムだとキッドは考え、そのメカニズムが駆動しない社会は退化に向かうと主張しているのである。⁽¹⁰⁾ゆえに、キッドの社会進化を特徴づける利他性の発展を自然進化の過程から切り離して解釈するのは無理がある。生存競争という自然進化の過程を通じて利己性と利他性という対立する要素が生み出されてきたと解釈すべきであり、キッドの『社会進化』で社会進化を推し進める動因として位置づけられているのは生物進化のメカニズムのみだと解釈すべきである。また、『社会進化』では、奴隷制度の廃止や平等の実現など社会改革の成果を社会進化の結果として肯定的に言及されているものの、社会改革をもたらした要因は宗教に基づく利他性の発展であると論じるだけで、社会問題に対して人間がどのように主体性を発揮してきたのか、あるいは発揮すべきなのかは論じられていない。社会に進歩をもたらすのはあくまで生存競争という自然進化のメカニズムであり、社会進化は究極的には生物進化に還元されており、社会の行く末を生物進化のメカニズムに委ねるのが最善であるという考えを示唆している。この意味に限れば、キッドの『社会進化』は生物進化理論に基づく社会進化論の典型であると言えるのだ。

V おわりに

本稿では、社会ダーウィニズム研究史を概括した後、〈社会ダーウィニズム〉研究における論点を整理し、それに基づいてベンジャミン・キッド『社会進化』の位置づけを探る観点を示した。キッドの社会進化論だけでなく、一般に進化社会理論を分析する際には、進歩の位置づけ、そして

自然進化と社会進化との関係という二つの観点から分析を加えることが必要である。ここで展開した議論は、ある特定の観点から切った断面を描くことでキッド『社会進化』を解釈する見取り図を示したにすぎず、様々な要素を含み込んだ『社会進化』全体を分析してその全体像を示したわけではない。さらに、同じような観点から『社会進化』におけるキッドの議論に即して分析を加え、他の進化社会理論を分析した研究と突き合わせて、19世紀終わりの進化社会理論というコンテキストにキッドの社会進化論を位置づける必要がある。

本研究は JSPS 科研費25884051「19世紀末イギリスの進化社会理論における〈機会の平等〉概念の展開」（研究活動スタート支援）の助成を受けたものである。

註

- (1) 日本の例としては、斎藤貴男『機会不平等』がある。本書の44-45ページで社会ダーウィニズムについて説明されている。結論も社会ダーウィニズム批判で締めくくられている。
- (2) ロバート・C・バニスターは、アメリカにおける社会ダーウィニズムを再検討する著書の序文を、「社会ダーウィニズムは、ほとんど誰もが知っているように、悪いものである」(Bannister 3)という文から始め、〈社会ダーウィニズム〉は後の時代から見た19世紀後半の保守主義を批判するために動員された概念だと提えている。
- (3) このような負荷を背負った〈社会ダーウィニズム〉が思想史研究における分析概念にふさわしいかは疑問である。進化論を基盤とした社会思想としてもっと広い概念である〈社会進化論〉を用いるのが望ましいと考えている。しかしながら、社会進化論という言葉が意味するものとしては、生物進化論を社会に適用する理論だけでなく、社会がどのように進化していくのかを説明する理論もある。両者は社会ダーウィニズム概念においては重なっているが、生物進化論によらない社会の進化を説明する理論もありうるのが社会進化論という言葉を用いる際の難点である。このような理由もあって、英語の「evolutionary social theory」の日本語訳である〈進化社会理論〉という用語を進化という概念を鍵にして社会を説明する理論を一般的に指示するのに用いている。
- (4) ここでいう〈個人主義〉(individualism)は、貧困問題などの社会問題を解決するために国家による社会改革を求める〈集団主義〉(collectivism)と対立する政治イデオロギーであり、個人の自由を最大化するために国家の役割と権能を削減することを主張する政治的立場である。個人主義のマニフェストとされる著作がスペンサーの『人間対国家』(1884)である(Spencer)。
- (5) ダーウィニズムと社会ダーウィニズムの違いを強調するものとしてはRogersの研究が、ダーウィン理論とスペンサー理論の違いを強調する研究の例としてはFreemanの研究がある。いずれの場合も、両者を完全に同一視することができないのは当然だが、両者を完全に切り離すこともできない。両者を切り離そうとする試みに対して現在では多くの進化理論史研究者が批判的である。
- (6) 社会ダーウィニズムとの関連で、マルサスとダーウィンとのつながりが議論されてきた。両者のつながりを強調するヤングのような見解に対して、マルサスと社会ダーウィニズムを結びつけマルサスとダーウィンを切り離すことでダーウィンと社会ダーウィニズムを切り離そうとする議論もある。そのために、ダーウィンが自らの進化理論を形成する際にマルサスの人口理論が決定的に重要だったわけではないという議論がなされることもある。Rogersの論文はこのような議論の典型例である。

- (7) キッドの人生とキャリアについては、唯一の評伝と言える Crook, *Benjamin Kidd* を参照すべきである。
- (8) Bannister 150-58. クルックの言う「一般論者」から批判された「すべての社会ダーウィニズムはまさに改革ダーウィニズムであった」というバニスターのテーゼは、キッドの社会進化論を論じる節を締めくくる一文で提起されている (Bannister 158)。
- (9) トマス・ディクソンはヴィクトリア時代における利他主義の興隆を研究した著書で、「キッドは利他的な感情が生物進化によって生み出されることを完全に否定」しており、宗教など文化的な手段で、特に宗教改革で誕生したプロテスタントの宗教を通じて、利他性はもたらされたというのがキッドの考えであると論じている (Dixon 305)。
- (10) マルサスの人口理論に基づいて社会にかかる人口増加の圧力という武器で社会主義を批判する手法はハクスリーに拠っていると考えられる。ハクスリーの社会主義批判も含めてマルサスの人口圧と進化社会理論の政治性については、藤田祐「進化社会理論とマルサス」で論じている。
- (11) ディクソンも註(9)で参照した議論のすぐ後で、キッドの理論では進歩を保証するのは競争のみであると述べている (Dixon 305)。

参考文献

- Bannister, Robert C. *Social Darwinism: Science and Myth in Anglo-American Social Thought*. American Civilization. Ed. Allen F. Davis. Philadelphia: Temple UP, 1979.
- Bellomy, Donald C. "Social Darwinism Revisited." *Perspectives in American History* ns 1 (1984): 1-129.
- Bowler, Peter J. *Biology and Social Thought: 1850-1914*. Berkeley: Office for History of Science and Technology, U of California at Berkley, 1993.
- . *Evolution: The History of an Idea*. 25th Anniversary ed. Berkeley: U of California P, 2009.
- . *The Invention of Progress: The Victorians and the Past*. Oxford: Blackwell, 1989.
- [ボウラー、ピーター・J 『進歩の発明——ヴィクトリア時代の歴史意識』岡崎修訳 平凡社 1995年]
- . *The Non-Darwinian Revolution: Reinterpreting a Historical Myth*. 1988. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1992.
- [ボウラー、ピーター・J 『ダーウィン革命の神話』松永俊男訳 朝日新聞社 1992年]
- Crook, D. P [aul] ., *Benjamin Kidd: Portrait of a Social Darwinist*. 1984. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Crook, Paul. "Social Darwinism: The Concept." *History of European Ideas* 22 (1996): 261-74.
- Darwin, Charles. *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*. 2nd ed. 1879. Penguin Classics. London: Penguin, 2004.
- [ダーウィン『人類の起原』池田次郎&伊谷純一郎訳 今西錦司責任編集『ダーウィン』世界の名著50 中央公論社 1979年]
- Desmond, Adrian, and James Moore. *Darwin's Sacred Cause: Race, Slavery and the Quest for Human Origins*. 2009. London: Penguin, 2010.
- [デズモンド、エイドリアン&ジェイムズ・ムーア『ダーウィンが信じた道——進化論に隠されたメッセージ』矢野真千子&野下祥子訳 NHK出版 2009年]
- Dixon, Thomas. *The Invention of Altruism: Making Moral Meanings in Victorian Britain*. 2008. A British Academy Postdoctoral Fellowship Monograph. Oxford: Oxford UP, 2011.
- Freedman, Michael. *The New Liberalism: An Ideology of Social Reform*. 1978. Oxford: Clarendon, 2011.

- Freeman, Derek. "The Evolutionary Theories of Charles Darwin and Herbert Spencer." *Current Anthropology* 15 (1974): 211-37.
- Greene, John C. "Darwin as a Social Evolutionist." *Journal of the History of Biology* 10 (1977): 1-27. Rpt. in Greene, *Science* 95-127.
- . "Darwinism as a World View." Greene, *Science* 128-57.
- . *Science, Ideology, and World View: Essays in the History of Evolutionary Ideas*. Berkeley: U of California P, 1981.
- Halliday, R. J. "Social Darwinism: A Definition." *Victorian Studies* 14 (1971): 389-405.
- Hawkins, Mike. *Social Darwinism in European and American Thought 1860-1945: Nature as Model and Nature as Threat*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Hofstadter, Richard. *Social Darwinism in American Thought*. 1944. Boston: Beacon, 1992.
- Kidd, Benjamin. *Social Evolution*. 1894. Cambridge Library Collection. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Malthus, Thomas Robert. *First Essay on Population 1798*. London: Macmillan, 1926. Rpt. of *An Essay on the Principle of Population, As It Affects the Future Improvement of Society, with Remarks on the Speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and Other Writers*. London, 1798.
- Rogers, James Allen. "Darwinism and Social Darwinism." *Journal of the History of the Ideas* 33 (1972): 265-80.
- Semmel, Bernard. *Imperialism and Social Reform: English Social-Imperial Thought 1895-1914*. 1960. New York: Anchor, 1968.
- [センメル、バーナード『社会帝国主義史——イギリスの経験 1895-1914』野口建彦&野口照子訳 みすず書房 1982年]
- Spencer, Herbert. *The Man Versus the State: With Six Essays on Government, Society, and Freedom*. Indianapolis: Liberty Fund, 1981.
- Young, Robert M. "Darwinism Is Social." *The Darwinian Heritage*. Ed. David Kohn. Princeton: Princeton UP, 1985. 609-38.
- . *Darwin's Metaphor: Nature's Place in Victorian Culture*. 1985. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- . "Malthus and the Evolutionists: The Common Context of Biological and Social Theory." *Past & Present* 43 (1969): 109-45. Rpt. in Young, *Darwin's Metaphor* 23-55.
- 斎藤貴男『機会不平等』文藝春秋 2000年
- 藤田祐「進化社会理論とマルサス——進歩をめぐる人口圧の二面性」『ヴィクトリア朝文化研究』7 (2009): 18-34.

